



特集 敗戦74年、「加害」と「被害」を考えるために

朗読劇『骨は叫ぶ・96年前の記憶』に取り組む —学生たちが向き合う関東大震災時の朝鮮人虐殺—

永田 浩三

今年の春から、わたしの3年ゼミ生17人は、関東大震災時の朝鮮人虐殺について書かれた研究書、証言記録、調査報告を手分けして読んできた。メディアと社会を専門に学び、その多くは2年生の時にチームを作りドキュメンタリー番組を制作してきた。これまでも、ヒバクシャと核兵器禁止

て、がんばって？あるいは使命感にかられて殺したのだ。これっていったいなんなのか。テーマはこれまでになく手ごわい。学生たちは悩みに悩んだ。

条約、杉田水脈議員のLGBT差別発言といったテーマにも向き合ってきた。彼らは、流言飛語が悲劇を生んだことについてはおおまかには知っているようだった。だが、資料を読み進むうちに、ことはそんな簡単な話ではないことに気づくようになった。

大震災という自然災害に見舞われ、衣食住など自分の身の回りのことを確保することに汲々となっていたはずのひとびとが、なぜ朝鮮半島からやってきたなんの罪もないひとたちを殺害するという、恐ろしいことに手を染めたのか。当たり前のことだが、当時のひとびとの誰もが普通の人間の感情を持っており、ひとを殺すということが、犯してはならない重い罪であることを知っていた。それでも殺した。それは無理？し

虐殺の現場をリアルに記録したフィルムは残っていない。そんななか、学生たちは一枚の絵に出会った。キンダーブックなどの絵本の挿絵で知られる画家・河目悌二がひそかに残した水彩画である。場所は隅田川のほとりであろうか。まるで虐殺のようすが、テレビの実況中継のように描かれている。絵の真ん中に、今まさに殺害しようとする場面が置かれている。後ろ手に縛られたひとりの朝鮮人を4人の人間が取り囲む。刀や竹槍、木刀で斬りかかる。朝鮮人の頭からは血が噴出し、後ろ向きに倒れそうになっている。横には、すでに犠牲者5人が斃れている。連行されたばかりの朝鮮人もいる。銃剣を突きつけているのは、4人の兵士たち。たくさん野次馬。夏用の白い制服の警察官がひとり手を広げて立っている。ディテールを読み込めば読み込む

ほど、恐ろしくなる。

絵から浮かびあがってくることはこうだ。軍や警察は本気で制止などしていない。黙認し、見て見ないふりをしているようにも見える。

学生たちは、この絵の風景のなかにセリフをつけた。

朝鮮人「お願いです。どうか殺さないでください！」

自警団「お前ら朝鮮人のせいで、この町はすべてむちゃくちゃにされたんだ。お前たちが火をつけ、井戸に毒を入れた。だから、ぜったいに生かしちゃおけねえ」

絵の右手後方には、川べりで展開する虐殺を一目見ようと、たくさんの群衆が押し寄せるさまが描かれている。学生たちはそこにもセリフを付加した。

群衆「いいぞ、いいぞ。朝鮮人なんて皆殺した。ざまあみろ！」

画面全体からは異様な殺気が漂い、被害者のうめき声とともに、虐殺に手を染めた首謀者たちの激しい息遣いや、そのまわりであおっている群衆の怒涛のような叫び声や歓声が溢れかえっているようだった。犠牲者以外でこの絵に描かれている人物に、すべて責任があり、深く関わっているのではないかと、学生たちは受け止めた。

民衆たちは、主体的にデマを流し、デマに翻弄され虐殺は起きた。これまではそう語られて来た。だが、調べていくうちに、流言飛語の発信源の多くは民衆ではなく、軍や警察だったことがわかってきた。民衆が率先して殺したのではなく、軍や警察がお墨付きを与え、そのかし、殺させた例がいくつも見つかった。

虐殺の仕方については、たくさん証言がある。学生のひとりには、「ほうせんかの家の西崎雅夫さんがまとめられた1万円近くの大著を読み込んだ。そこに集められた証言は、あまりにリアルだった。

「上等兵がやってきて、槍で橋の上からみんな突き落として、ヘイヘイヘー、ズブリズブリね」

「うすぐらい土手の桜並木に朝鮮のひとが一本の桜の木にひとりずつ縛り付けられているではありませんか。そのまわりを兵隊がサーベルをガチャつかせながら、今夜こいつらをぶった斬るんだと、息まいていました」

「（橋の下で蚊帳をつって避難していた）夜、頭の上で、阿鼻叫喚、ぎゃつという声があった。母がマッチを擦った。押し殺したギャツという叫びが母の口から辛くもついて出た。血よ、血よ。わたしの眼はぱちつと開

いた。橋の上からしたたり落ちる液体が、蚊帳を伝わる。赤褐色。血だ。わたしには、阿鼻叫喚のなかに、アイゴーと泣き叫ぶ声が混じって、いようなど、聴き分ける分別などあるはずはなかった……」



学生たちによる朗読劇の準備風景

ひとつひとつの言葉に、学生たちはおびえ、震えた。こうした言葉を自分のからだを通して発表する朗読劇の作成が始まった。それぞれの証言を語ることは大事だが、もうひとつ大事なことは、この事件をどう分析し、歴史的に位置づけることだった。戒厳令は、各地で発生した虐殺を抑えるどころか、虐殺を生み出す原因ともなった。井戸に毒が入れられたという流言は、飲み水に困る民衆たちの憎悪を拡大する要因となった。

そんななか、学生たちが出会った詩がある。1960年代からおよそ40年間続いた中米ニカラグアの内戦。罪なきひとびとが軍や警察によって虐殺された。無念の死を忘れてはならない。抵抗する人たちが死者たちの骨を掘り出した。死者たちの一对の肩甲骨を背負ってみる。それはまるで天使の羽根のようだった。写真家のダニエル・サラサルが、その肩甲骨のコラージュ写真を街頭に貼るという運動を写真に撮り、世界に伝えた。日本では、飯島みどりさんや徐京植さんが伝えた。徐さんは運動へのオマージュの詩を書いたが、今回学生たちは、それをヒントにして、朝鮮人虐殺の詩を作った。

まだ完成形ではないが、その一部を紹介したい。

「わたしは、あの世からやってきた闇の天使。背中には一对の白い翼。

それは死者たちの肩甲骨だ。冷たく湿った地面の下で、腐り果てながら叫びをあげる。

ほら、ここにいますぞー。ここにいますぞー。

さつさと忘れようとしている者たち、なかつたことにしようとする者たち。

それでいいのか、忘れていいのか。肩甲骨の羽根をつけて、わたしたちは

飛べるのか。

故郷、朝鮮半島まで飛べるのだろうか。ねえきみ、飛ぶの手伝ってはくれないか。

ほら、ここにいますぞー。ここにいますぞー。ここにいますぞー。ここにいますぞー。」

学生たちは96年前の出来事について学ぶうちに、およそ半世紀前から、多くのころあるひとたちが、事件を掘り起こし、追悼し、供養し、語り継いでいくという活動をつづけておられることを知った。絹田幸恵さん、大竹米子さん、平形千恵子さん……先人たちの業績はすごいものがある。

1999年、千葉県八千代市にある高津観音寺の境内に、殺害された6人の犠牲者を弔うために、「関東大震災朝鮮人犠牲者慰霊の碑」が建てられた。碑の裏にはこんな文が刻まれるはずだった。

「大災害の中で、陸軍習志野練兵場の一角高津庵舎に、朝鮮人中国人の収容所が設置された。陸軍は軍管理の下にあったこの収容所の中から、指導者とみなされる者を……（中略）……近接の数力所の集落に振り分けて『処分』することを命じた。絶対権力を持つ軍の命令を受けた集落は、軍の命令の呪縛に縛られ、長い間口を閉ざしてきた



関東大震災朝鮮人犠牲者慰霊の碑、高津観音寺内（プログ、散歩の変人より）

……（中略）……この地に眠る犠牲者の御霊が明るいうちにめぐり合えるまでに、四分の三世紀という長い時を必要とした。二度とこのような悲劇を起こすことのないよう、地区住民はもとより、全国各地有志の願いを込めて、ここに六名の犠牲者慰霊の碑を建立する。」

学生たちは、碑文をめぐるやりとりも会話にした。

追悼委員会「碑の裏側に、朝鮮人処分の事実をはっきり書くべきではないでしょうか」

地域住民①「わたしたちは、軍から命令されたのだから、被害者でもあるんだ……」

地域住民②「碑に刻まれたら、われわれの子孫に迷惑をかけやしないだろうか」

結局、地域の合意は得られず、この碑文は刻まれることはなかった。だが、こうした真摯なやりとりがなされたことに、学生

私たちは一条の希望の光を見たようだった。
加害の歴史を刻むことがいかに難しいか。この出来事はわたしたちが暮らす日本社会の縮図とも言える。

今回、わたしたちは、平形千恵子さんたちにお世話になり、9月8日(日)の午前中、高津観音寺で朗読劇『骨は叫ぶ・96年目の記憶』を発表させていただく(別記参照)。詩、絵、朝鮮人留学生たちの会話など、いろんなオ리지ナルの場面も登場する予定だ。ご縁を大事にし、恥ずかしくないものにしたいとみな意気込んでいます。

(ながた・こうぞう／武蔵大学社会学部教授)

「関東大震災96年 慰霊祭・学習会」

9月8日(日) 会場 高津観音寺
(千葉県八千代市高津1347 最寄り駅は京成本線八千代台 047-450-2753)
第1部 学習会 本堂にて
10時30分～11時 慰霊の歩み
11時～11時45分
朗読劇『骨は叫ぶ・96年前の記憶』
(武蔵大学社会学部永田ゼミ3年生による)
11時45分～12時 質疑
第2部 慰霊祭 境内にて 13時～14時
第3部 フィールドワーク(巡回) 14時30分
なお、京成本線の大和田駅下車の「大和田シード」では、9月7日～10日、特別展を開催
お問い合わせ
平形千恵子 047-438-1757

東京大空襲74年 朝鮮人犠牲者は、なぜ、そこに、いたのか

梁 大隆

去る3月16日、『東京大空襲74周年朝鮮人犠牲者追悼会』が、東京朝鮮人強制連行真相調査団(以下調査団)の主催で行なわれた。2007年から始まったこの追悼会は、今年でやっと13回目になる。

それ以前、東京大空襲朝鮮人犠牲者問題は語られてこなかったばかりか歴史の闇に埋められるところであった。

ご承知の通り、東京大空襲とは、1945年3月10日未明、マリアナ基地群から発進したアメリカ軍325機が焼夷弾1665トンを経済の下町地域に投下し、僅か2時間半で10万人以上の罪のない命を奪い、負傷者約40万人、焼失家屋約26万8000戸、被災者は100万人にのぼるといいう大惨事で、瞬間的大虐殺として人類史上、世界に例をみない傷ましいものである。

アメリカ国防総省戦略アナリスト元顧問として核兵器指揮統制分野を担当したダニエル・エルスバークは、「アメリカが一日のうちに実行した大虐殺で歴史上一番目は東京大空襲、二番目は広島、三番目は長崎で

ある。』(『世界』2010年1月号49頁)と述べている。

民間人を含む無差別虐殺としてのこの傷ましい戦争の大惨事は、体験者などにより語り継がれ、現在もなお、諸問題を抱える中、その解決にむけた取り組みも行なわれている。しかし、はたして、約10万人の犠牲者はそのすべてが日本人であったのだろうか。

この大惨事は、2000年代中盤まで、60余年の長い間、朝鮮人とは無縁のものと思われ、ほどなく朝鮮人犠牲者の問題は風化し歴史の闇に永遠に埋められるところであった。

調査団は、去る2005年より、この問題に本格的に着手し、長い歴史の壁と幾多の困難を乗り越え、様々な貴重な研究と実績を積み重ねてきた。

日本による植民地支配下において、多くの朝鮮人は生活苦等により、渡日を余儀なくされ、第2次大戦末期、特に国家総動員法(1938年4月)以降、極度の労働力不足に陥った日本は、朝鮮国内から多くの青